

アリ訳

男装王太子
追放を望む
は

Wakeari
dansououtaishi
ha tsuihou wo
nozomu

CHARACTERS



ハムリン

世界がループしている
原因のヨシカを
サポートする精霊。
元となったゲームでは
エデンのお助けキャラ
として存在していた。

ヨシカ

“暁の国ゾンネ”の王太子。
日記帳を開いた瞬間、
前世の記憶が甦る。
処刑されるのを回避するため、
追放エンドを目指す。

エデン

“宵の国アーベント”の第七王女。
世間では絶世の美少女だと
噂されるヨシカの婚約者。
可憐な見た目によらず
活発な一面もある。



メルヴ

世界樹と共生する守護精霊。
メルヴが存在しない世界樹は、
そのうち枯れてしまうと
言われている。

オルグイユ

エデン姫を取り巻く七騎士の
隊長であり、“傲慢”を司る。
“宵の国アーベント”
随一の剣の遣い手。

アダルヴォルフ

“暁の国ゾンネ”の
第二王子である半獣人。
とある理由で数年前から地下牢に
囚われているようだが……？



Wakeari
dansououtaishi ha
tsuihou wo nozomu



男装王太子は 追放を望む



第一章

男装王太子は突然前世を思い出す!?

006

第二章

男装王太子はまさかの状況に頭を抱える!?

058

第三章

男装王太子は作戦を実行する!?

115

第四章

男装王太子は世界樹を救う!?

220

第五章

男装王太子は黒幕と対峙する!?

250





第一章 男装王太子は突然前世を思い出す!?



「殿下！ ヨシカ王太子殿下！ エデン姫の祝賀会の計画書に、目を通されましたか？」

低血圧に苦しむ私に追い打ちをかけるように、愛人のひとりであるヴォルフ公爵夫人が責め立ててくる。

差し出された紙の束からはどうしてか、嫌な予感、しかしなくて、目を逸らし続けていたのだ。

エデン姫というのは隣国である、^{よい}宵の国アーベント^{よい}の第七王女。

「妖精姫」と呼ばれ、絶世の美少女だと囁^{ささや}かれる彼女は私の婚約者である。

俗に言う政略結婚というもので、^{あかつき}暁の国ゾンネ^{あかつき}の王太子である私との結婚が決まった。

今回、三年後の結婚式に向け、エデン姫を招待し、皆にお披露^{ひろうめ}目を行う。

計画を立てたのはヴォルフ公爵夫人だが、王太子である私が主催したという名目なのだ。

その計画書を目にするたびに、動悸^{どうき}と冷や汗、それから言葉では表せない不安に襲われ、まともな思考ができなくなっていた。

「そろそろはつきり方向性を定めていただかないと、こちらも動きようがありません」

「わかっている。わかっているから、今日は下がってくれ」

ヴォルフ公爵夫人は明らかに不服だ、という表情でいたものの、何も言わずに会釈^{えしやく}し退室していった。

それにしても、私はいったいどうしてしまったのか。

ヴォルフ公爵夫人が置いていったエデン姫の祝賀会の計画書に手を伸ばす。しかしながら、触れただけで息苦しさを覚えるのだ。

もしや頑張り過ぎて、疲労が溜まっているのか。三年前に父王が病に倒れ、執務すら敵わない状況が続いていた。

私は父王の代わりとなり、日々働いていたのだ。

ただ、拒否反応を示すのは、エデン姫の祝賀会について書かれた書類を見たときだけだ。他の文章を読んでも、特に変化はなかったはず。

そう思って引き出しの一番上を開く。

手に取ったのは、ここ一年ほど触れていない日記帳であった。

日記帳には魔法が仕掛けられており、普段は鍵がかかっているものの、私が手をかざしたら魔力を読み取って開けるようになるのだ。

これは私が十五歳の誕生日に、父王が贈ってくれたものだ。六年間使える代物しろもので毎日書いていた。去年、二十一歳の誕生日を迎えたので、これ以上書けなくなってしまうのだ。

そういえば熱心に書いていたな、と一年ぶりに日記帳めくを捲る。

すると、バチン！ と音を立て、日記帳の上に見た覚えがない魔法陣が浮かび上がった。

「なっ、これは!？」

パラパラ、パラパラパラとページが勝手に捲れる中、不可解としか言いようがない記憶が甦よみがえる。

それは——前世についてだった。

ヨシカ・フォン・エスターライヒとして生まれる前の私は、〝日本〟という国で平々凡々に育った女だったのだ。

そして、生まれ変わった世界についても思い出す。

ここはシミュレーションゲーム〝パラダイス・エデン〟とまったく同じだった。

前世の私は友達から、〝パラダイス・エデン〟を借りてプレイしていたのでわかる。

ゲームに登場する〝暁の国ゾンネ〟の王太子ヨシカは、エデン姫という婚約者がいながら大勢の愛人を囲い、それだけでなく、真実の愛に目覚めたと言って自国の子爵令嬢を未来の王妃にすると宣言。さらにエデン姫に子爵令嬢をいじめた罪をなすりつけ、国外追放を命じた。

その後、エデン姫を取り巻く七騎士に〝暁の国ゾンネ〟は滅ぼされ、王族は全員毒殺される。

七騎士というのは、エデン姫に心酔する七人の騎士のことだ。〝パラダイス・エデン〟で主人公であるエデン姫の恋愛対象でもある。

騎士の性格が七つの大罪にリンクしており、エデン姫に何かあれば牙を剥くのだ。

傲慢〝ごうまん〟で他人を見下す、剣の騎士オルグイユ。

強欲〝かうよく〟を常に抱く、双剣の騎士アヴァリアス。

嫉妬〝しつと〟深い、杖の騎士アンヴィ。

憤怒〝ふんぬ〟に支配される、槍の騎士コレール。

色欲〝しきよく〟を持って余す、鞭の騎士アンピュルテ。

「暴食」を好む、盾の騎士グルトヌリー。

「怠惰」に明け暮れる、弓矢の騎士パレス。

そんな七騎士は、エデン姫を苦しめた王太子ヨシカを許さなかった。

七騎士のひとり、剣の騎士オルグイユによって、王太子ヨシカは衆目の前で首をはね飛ばされてしまう。公開処刑というやつだった。

ゾツとして、全身に鳥肌が立つ。

いてもたってもいられず、執務室から飛び出す。護衛騎士達があとを追ってきたものの、手洗いを我慢してただけだ！ と強く言って下がらせる。

遠く離れた場所にある洗面所の鏡で自らの顔を確認した。

燃えるような真っ赤な髪に、輝く金の瞳、整った顔立ちに、すらりと伸びた手足。

赤髪は長く、三つ編みにして胸の前から垂らしていた。

この特徴的な造形は間違いない。

私は「パラダイス・エデン」でエデン姫の取り巻きに処刑される、悪役クズ王子に生まれ変わっていた。

頭を抱え、その場に座り込む。

王太子ヨシカとして、二十一年もの間、生きてきた。

国王として即位するために必死で勉強し、国民の模範になるべく清く正しく人生を歩んできた。これまで自分の生き方を否定する者は誰一人としていなかったのに——前世の記憶が戻った今、

とんでもない秘密を自覚してしまう。

それは王太子ヨシカが「女」であるということ。

背が五フイート九イン^{百七十七センチ}チあるうが、男顔で女性から猛烈にモテようが、紛^{まが}うことなき女なのだ。

ゲームの中で王太子ヨシカがエデン姫を傷付けるような言動を繰り返し、挙げ句の果てに国外追放を言い渡したのは、性別がバレないようにするためだったのだろう。

何を隠そう「宵の国アーベント」の者達はエルフのような長く尖^{とが}った耳を持ち、膨大な魔力を有するのだ。

エデン姫は極めて勘が鋭く、第六感と呼ばれる、ものごとの本質を感覚として掴む特殊能力にも長^たけていた。

王太子ヨシカは女性であることを、エデン姫に露見するのを恐れていたに違いない。
なぜ、性別を偽っていたのか。それは私が生まれる前に^{さかのほ}遡^{さかのほ}る。

王妃——今は亡き母——は、結婚して二年目に待望の王太子を生^うんだが夭^{ようせい}逝^{せい}してしまったのだ。
母は悲しみに暮れ、ふさぎ込む。

けれども第二子の妊娠をきっかけに、元気を取り戻した。

無事出産したものの、その子も病気を発症し、亡くなってしまった。

さらに二年後妊娠するも、母は流産してしまった。

あまりにもショックだったのか、母は引きこもるようになる。

それから五年後に、妊娠が明らかになり、出産する。そこで生まれたのが私だった。

世継ぎである王子でなく、王女だった。我が国で王位継承権を持つのは直系男子のみ。

母は世継ぎを望んでいたからか、私を王子と偽って育てることに決めた。

それまで傍に置いていた侍女全員を解雇し、当時、母の取り巻きをしていた令嬢達を集め、絶対にバレないようにと命じたのである。

それから一年後に母は亡くなった。死因は病死だった。

母の取り巻きだった令嬢達は信用のおける乳母と侍女と共に、私を教育してくれた。

私が十五歳の誕生日になると、かつて母の取り巻きだった令嬢達は、私の愛人として傍に侍るようになった。

それがヴォルフ公爵夫人を始めとする、五名の愛人達の正体である。

皆、すでに人妻だが、私を支えるために愛人と名乗って、傍にいてくれるのだ。

ちなみに「愛人」としている理由は、私に近づく女性を遠ざけるためである。彼女らの働きのおかげで、私に近づく女性はいない。

そんな秘密はさておいて。

母はもう亡くなった。だからこのような茶番劇を続ける必要なんてない。

ただ、未来の国王である王太子を生むのは、母の悲願だったのだらう。

ヴォルフ公爵夫人を始めとする愛人達は、私が王太子であり続けることを目的に日々、頑張っているのだ。

はーーーーー、と盛大なため息が零れる。

エデン姫の祝賀会に対して嫌悪感を抱いていたのは、私に前世の記憶があったからだろう。

王太子ヨシカが女だった、という設定は「パラダイス・エデン」に登場しない。

これからどうしたらいいものか、と考えていたら、天井から日記帳が落ちてきた。

「ヒッ!？」

執務室に置いてきた日記帳が、突然目の前に降ってきた。

いったいどうして？

開けたページを覗き込むと、ギョツとする。

日記帳は私の六年もの間の、愛人との日々が書かれているはずだった。

けれどもそこに書かれていたのは、まったく別人の文字。

手に取って読んでみると、そこにはとんでもないことが記録されていた。

○月×日

どうにかエデン姫を遠ざけなければいけない。

でないと、彼女の第六感で男装を見抜かれてしまうだろう。

酷い言葉^{ひど}をエデン姫にかけたところ、双剣の騎士アヴァリアスに殺されかける。

薬だと言って渡され、飲んでしまったものが毒だった。

本当に死んでしまうかもしれない。

○月△月

どうやらあのとき飲んだ毒で一度死んだらしい。

また時間が巻き戻ったようだ。

「こ、これは——!？」

日記帳には私ではない、ヨシカが書いたらしい記録があった。

内容については不可解の一言である。自分が殺された、という理解しがたい文章が何度も記録されているのだ。

「いったいどういう意味なんだ？」

誰かのいたずらか、はたまた創作のつもりなのか……？

首を傾^{かし}げているところに、声が聞こえた。

『この世界は、ゲームと同じように、繰^{ループ}り返しているんだよお！』

「うわああああ!!」

突然、日記に魔法陣が浮かんで、中から小さなネズミが出てきた。気配がなかったので、死ぬほど驚いてしまう。

体は丸っこくて、尻尾は短い。茶色と白が混ざった毛並みで、つぶらな瞳で見上げてきた。

どこかで見た覚えがあったが、すぐにピンとくる。

「お前は、パラダイス・エデンのお助け精霊、ハムリン!？」



『そうだよお』

ハムリンは日記帳の上に立ち、ぺこりと会釈する。

「ハムリンって、スパラダイス・エデングの主人公であるエデン姫の傍にいた精霊だろう？」

『そうだよお。でも、世界がループしている原因はヨシカにあるから、ハムリンがサポートするためにやってきたんだよお』

なんでもこれまでも王太子ヨシカを助けるべく、ハムリンが参上しようだが、疫病神やぐびようがみ扱いされ、傍に寄ることすらできなかったらしい。

「そもそも世界のループってなんなんだ？ スパラダイス・エデングには、そんな要素はなかったと思うのだが」

まず、世界の成り立ちについて、ハムリンが説明してくれた。

『ここは創造神が世界を創るさいに、人間界のゲームを参考にして生み出されたものなんだよお』
「なんでゲームをモデルに世界なんか創ったんだ？」

『創造神は、ネタ切れだと話していたんだよお』

あまりにも世界が次々と崩壊するため、創造神はいちいち創世にこだわっていられないと判断したらしい。

地球にある漫画やゲームをモデルにしどんどん創世していった結果、スパラダイス・エデングとまったく同じ世界が誕生したようだ。

『ただ、この世界にはバグ欠陥バグがあったんだよお』

その欠陥というのが、王太子ヨシカを起点としたループだと言う。

『パラダイス・エデン』には「周回要素」と呼ばれるものがあつて、それがループを繰り返す要素になったのではないか、というのが創造神の見解なんだよお』

周回要素というのは、ゲームによくあるレベルや装備などを引き継いで新しくゲームを始めるシステムである。それが、人々が生きる世界に反映されてしまったようだ。

「なぜ、ループの起点が私なのか？」

『それは——わからないんだよお』

がつくりとかな垂れてしまう。お助け精霊といつても、すべての情報を把握しているわけではないようだ。

『えーと、その辺も、ヨシカと一緒に調べたいんだよお』

「そんなこと、急に言われても……」

ハムリンはつぶらな瞳を潤ませ、じっと見つめてくる。

「この世界が正常な流れにならないことによって、創造神的に何か問題でもあるのか？」
次から次へと創世できるのであれば、この世界が機能していなくても、問題ないだろう。

『問題大ありなんだよお！』

なんでもこの世界が正常に動いていないと、他の世界にも連鎖的に不具合が広がっていき、最終的にすべての世界が消えてしまうようだ。

「なるほど。この世界は、創造神にとってたちが悪い病原菌みたいなものなのか」

ハムリンは頷きつつ、涙目で私の腕にヒシツとしがみついて懇願してきた。

『どうかこの世界のループを断ち切って、ハッピーエンドを迎えてほしいんだよ』

無茶を言う。けれどもループの起点が、王太子ヨシカ^カ になっている以上、私がかするしかないのだろう。

ここでふと気付く。もつとも重要な点だと思い、ハムリンに質問を投げかけてみた。

「そういえば、もともとこの体にいた、王太子ヨシカはどうした？」

元の王太子ヨシカはエデン姫に正体がバレないよう行動し、彼女を遠ざけた結果、殺されている。日記はそれで終わりではない。

なぜか殺される前まで時間が遡り、王太子ヨシカは時間を回帰している。

日記の日付は何度も戻っていて、王太子ヨシカは何度もやりなおしを行っていた。

しかしながら、そのすべてをエデン姫の七騎士に阻止され、死ぬという人生を繰り返しているようだ。

『元の王太子ヨシカは何度もやりなおしをする中で、生きるのが嫌になってしまったんだよ』

どうあがいてもループから逃れられない事実を知った王太子ヨシカは、自分の体に他人の魂を引き寄せる方法を学んだ。

『ループに屈しない、強靱^{きようじん}な魂の持ち主に、自分の人生を託したんだよ』

「それが私、というわけなのか？」

ハムリンはにっこりと微笑^{はほえ}みながら頷いた。

「なんだよ……それ」

世界の運命を託され王太子ヨシカとして生きるだなんて、平和な日本育ちの私には荷が重すぎる。

「私のどこが、強靱な魂の持ち主なんだ？」

『それに関しては、自信を持ってほしいんだよお』

強靱な魂云々はさておいて。

パラパラと日記帳を確認していたが、王太子ヨシカはありとあらゆる方法を試しているようにも思えた。

「エデン姫を避けたら失礼だろうと七騎士に殺される。逆に仲良くしても七騎士に殺される。逃げて、恥を掻かせるなと七騎士に殺される。八方ふさがりで、いったいどうしろって言うんだ！」

王太子ヨシカは七騎士から毒殺、刺殺、圧殺、殴打、格殺、銃殺、焼殺、爆殺、虐殺、斬殺、縊殺、撃殺、謀殺、笑殺——ありとあらゆる方法で闇に葬られていた。

最後の笑殺だけ詳細が気になるが。いや、そんなことなど考えている場合ではない。

「何か王太子ヨシカが試していない方法があるのではないのか？」

ハムリンは首を傾げたまま、動こうとしない。

「お助け精霊って、何をしてくれるんだ？」

『いつでも君の傍にいてあげるよお』

「いや、そんな、悲しいときに支えてくれる恋人みたいなことを言われても……」

エデン姫に嫌われても好かれても、避けても逃げて、バッドエンドは逃れられない。

日記帳を読み込めば読み込むほど、八方塞がりな状況であることがわかる。

「無害の人を装っても、七騎士が、^ス曉の国ゾンネを滅ぼして、王族は全員処刑されているではないか！」

なぜ、七騎士の反感を買っていないのに、このような状況になると言うのか。ハムリンを問い詰めると、とんでもない事実が発覚した。

『たぶん、ゲームの世界だった名残で、^{なごり}王族の処刑が強制イベントと化しているんだよ』
思わず頭を抱える。

処刑から逃げようとしたら、七騎士が地の果てまで追いかけてくるらしい。恐ろしいとしか言いようがない。

「王太子ヨシカは何度も何度も生き延びるために行動を起こして、失敗して、殺されて……心が折れてしまったのか」

ハムリンは控えめに、こくりと頷く。

「強制イベントとやらがある以上、私がどうあがこうが無駄なのではないか？」

まっとうでしかない私の疑問に、ハムリンは弁解するように訴えた。

『さつきも言ったけれど、この世界には、^スパラダイス・エデンと同じように、欠陥があるって、神様が話していたんだよお！』

王太子ヨシカが試したルート以外で、何かループを止める打開策があるはずだ、とハムリンは真剣な眼差^{まなざ}で言う。

「いや、私には無理だ」

なぜかと言えば、パラダイス・エデンは何周もやったわけではない。ヘビーユーザーであれば、ゲーム中の欠陥についても詳しく把握していて、その穴を突くこともできただろうが。

私がやってきたのはミニゲームのやりこみと、エデン姫グッズを集めていたことくらいか。どちらもこの世界では役に立たないだろう。

「私は一周しか、パラダイス・エデンをプレイしていないんだ」

野菜を育てたり、料理を作ったり、魚釣りをしたり、コツコツ地道なミニゲームを楽しんでいた。中でも夢中になったのは、魔法薬作りだ。

魔法薬の作成には大量の魔力を必要とするので、レベル上げに勤しんでいたのを思い出す。

ただ、これは恋愛ゲームなので、七騎士とのイベントが作業を邪魔してくるのだ。

大切に栽培していたニンジンの苗をウツカリ踏みつけ、詫びわとしてデートしてやろう、なんて発言したのは誰だったか。腹が立ちすぎて、名前や顔は覚えていなかった。

システムやエデン姫のビジュアルは最高だったのに、七騎士のキャラクターが気に食わず、最終的には役目を果たさずに追放エンドになってしまった。

「ん、追放エンド？」

パラダイス・エデンには、七騎士が勘違いからうっかり滅ぼしてしまった暁の国ゾンネの復興という目的があった。

素材を集めるクエストをこなして建物を修繕し、治水を整え、七騎士に命令し魔物を討伐させる。

それらを達成しなければ、父親である「宵の国アーベント」の国王よりお叱りを受け、国に戻るように言われる。これをファンの間では、主人公エデンの追放イベントと呼んでいた。

「追放……。そうだ、追放だ！」

ぐうたら王太子を演じ、追放の刑に遭えば処刑エンドを迎えることもなくなるだろう。

『たしかに、これまで王太子ヨシカが追放されたという例はなかったように思えるんだよお』

日記を読み返してみたが、それらしき記録は見当たらない。

「よし。ならば、目指せ追放！ 目指せ生存ルートを目標に頑張ろう」

『おー！』

ハムリンは頬袋ほおぶくろからいそいそと羊皮紙を取り出す。四次元ポケットか！ と突っ込みたくなかったが、ぐっと我慢した。

ハムリンはキリッとした表情で、契約書にサインするよう差し出してくる。

「これはなんだ？」

『きちんとこの世界をループから救い出します、という契約書だよお』

「また、図々しいものを出してきたな」

いったいどういった内容なのかと気になったので、受け取って目を通す。読んでいくうちに、とんでもない記述を発見してしまった。

「死んだらゲームオーバー。これまでの王太子ヨシカのようにループしませんので、あしからず、って、どうということなんだ!？」

『一回死んだら、それで終わりって意味だよお』

「それはわかる！　もしも私が死んだら、王太子ヨシカの体はどうなるのか？」

『また別の、適性がある魂を入れて、世界のループ脱却をお願いするんだよお』

なんて酷い神様なんだ……愕然^{がくせん}としてしまう。

「死んだ私の魂はどうなるんだ？」

『えーっと、あなたはこの世界の住人ではないから、魂は彷徨^{さまよ}って元の世界に行くけれど、肉体はないから、浮遊霊になるかもしれないんだよお』

「なっ！」

今まであまり気にしていなかったが、私はすでに死んで火葬まで済まされているようだ。

いったいどうして死んでしまったのか。前世の記憶はどうやら完全に戻ってきたわけではないようだ。

『でも、その、きちんとループ脱却できたら、あなたの魂はこの世界の存在^もだと認められて、死んだとしても、新しい肉体に宿ると思うんだよお』

浮遊霊になるのを避けたければ、この世界をループから解放させるしかないのか。

正直、腹立たしい気持ちでいっぱいである。肉体はすでに滅びているのに、新しい体を与えられ、ハードモードの人生を強制的に歩まなければならないなんて……。

ただ、エデン姫が興^{こし}入れしてくるまで、三年もある。

ぐうたら王子のイメージを植え付け、追放されるまでには充分過ぎる猶予^{ゆうよ}があった。

やるしかないのだろう。

「仕方がないな」

むしろしゃした気持ちで、契約書にサインした。

文字が金色に輝き、羊皮紙はどこかへと消えていく。創造神との間に結ばれた契約が、しっかり成立したのだろう。

『これから、ハムリンも精一杯お手伝いするんだよお！』

そんなことを言うハムリンの首根っこを摘まんで、視線を同じ高さにした。

「おいおい、[〃]手伝う[〃]だと？ ずいぶんと他人事^{ひとこと}ではないか」

『あ、えっと、そのお……』

無限ループから救うという行為は、この世界の精霊であるハムリンは当事者である。お手伝いだなんて、子育てに参加した感をだすだけの父親みたいな発言をしないほしい。

「手伝うんじゃない。一緒に[〃]やる[〃]んだ」

ガンを飛ばしつつ脅^{おど}すように訴えたら、ハムリンは何度もこくこく頷いていた。

手と手を取り合って、一緒に頑張^たろう。そう、称え合ったのだった。

ループを回避するための方向性が定まったのはよかったものの、どうやってぐうたら王太子像を作ればいいのか。

一応、エデン姫にはダメ王子っぷりを手紙か何かでアピールしようと考えていた。

エデン姫が結婚に嫌気^{いやけ}が差し、アーベント王が激怒して抗議文でも送ってきたら、なんらかのレッテルが貼られるに違いない。

ただ、それだけでは追放とはいかないだろう。

かと言って、本当に何もしないぐうたら王子にはなれない。

現在、父王は病に伏している。もしも私が政務を放りだしたら、国が傾いてしまう。代わりに政務に就ける者がいれ^つばいいのだが。

第二王妃ゲートルトの子である第三王子ハインツはまだ六歳と幼い。

「他にはもう第二王子しか——あ！」

いるじゃないか！ と第二王子の存在を今さらながらに思い出す。

第二王子は公妾だった獣人族の娘ゲルダの息子で、名前はアダルウオルフ、年齢は十二歳くらいだったような。

彼に執務仕事のやり方を叩き込み、やってもらえばいいのだ。

ただ、アダルウオルフは三年前から表舞台から姿を消している。

これまで、彼の行方についてさほど気にしていなかった。だが、パラダイス・エデン^ンのシナリオを知っていると、アダルウオルフがどこにいるかわかる。

アダルウオルフの母はフェンリル族の血を引く者で、その息子であるアダルウオルフは半獣人なのだ。王太子ヨシカの母親が亡くなり、父王が病になったのをきっかけに、なぜかアダルウオルフは罪人の塔にある地下牢へ囚^{とら}われてしまったのだ。

実行に移したのは、いったい誰だったのか。その辺ははっきりゲーム本編で描写されていなかったような気がする。まあ、テキストを読み飛ばしていた可能性もあるが。

何はともあれ、アドルウォルフを助けるならば、一刻も早いほうがいい。

ただ、このまま外に出たら、護衛達に見つかってしまう。

洗面所の窓から外に行くしかないか。

しかしながらここは五階にある。飛び降りたら確実に死ぬだろう。

「ハムリン、ここから外に脱出したいのだが、どうすればいい？」

『だったら、この「転移マップ」を使うといいよお』

ハムリンが『マップ・オープン！』と言うと、城内のデジタルマップが魔法陣のように浮かんできた。まるでゲーム画面のようなマップを前に、少し戸惑ってしまう。

「こ、これは……？」

『お城の転移マップだよお』

王太子ヨシカがこれまで足を運んだ場所は淡い光を放っている。一方で、暗くなっている場所は未踏の地らしい。

一度足を運んだ場所には自由に行き来できるようだ。

『光っている場所をタップするだけで、瞬時に移動できるんだよお』

なんとという便利システムなのか。それと同時に、ここは本当にゲームを元にした世界なんだな、と思ってしまう。

ハムリンは転移マップを消し、一度出してみるように勧める。

「……マップ・オープン」

シーンと静まり返る。転移マップは出現しなかった。

『もっと大きな声で叫ぶんだよお』

微妙に恥ずかしいのだが……。もう一回、挑戦してみた。

「マップ・オープン」

『もっとだよお！』

「マップ・オープン！」

『もっともっと！』

「マップ・オープン!!」

こんしん
渾身の力で叫ぶと、転移マップが出現した。

これを使うときはこの声量を維持しなければならないのか……。まあ、何回か使ったら慣れるだろう。たぶん。

元の王太子ヨシカは地下牢に足を運んだことがあったらしい。マップに触れると、くるりと景色が変わっていく。

目の前にそびえ立つ、罪人の塔。瞬間移動したようだ。空は晴天なのに、この辺りだけ黒い雲が広がっていた。

元の王太子ヨシカがここに足を踏み入れた実績が残っていたのは、処刑される前に収容されてい

たからなのだろうか。

罪人の塔にある地下牢は主に重罪人を収容する場所だったが、老朽化を理由に現在は使われていない。その点を逆手^{さかて}に取って、アダルウォルフを監禁しているのだろう。

塔の前には守衛の騎士がいたものの、父王の命令で監査にやってきた、と言うとあっさり通してくれた。地下への出入り口にも騎士が配置されていたが、先ほどと同じ理由で通過できた。

地下へ繋がる階段は、灯り^{あか}が点^{とも}されておらず真っ暗だった。私の肩に乗っているハムリンが光の球を魔法で作ってくれたので、それを頼りに進んで行く。

らせん状になっている深く長い階段を降り、ついに地下牢へ辿^{たど}り着く。

「思っていた以上に暗いな。ハムリン、光球をもっと明るくできるか？」

『まかせるんだよお！』

周囲をぼんやり照らすばかりだった光は、地下牢全体をしっかりと照らしてくれた。

頑丈な鉄格子が露^{あら}わとなり、その奥に大きな黒い物体があるのに気付く。

「あ、あれは——」

『ゲルルルルル』

私を目にするなり、低く唸^{うな}るのは、巨大な黒狼^{こくろう}——アダルウォルフである。

ここで前世の記憶が甦^{よみがえ}った。

アダルウォルフは何者かに獐^{どう}猛^{もう}化の魔法薬を飲まされ、エデンや七騎士と戦うという、バラダイス・エデン^グのラスボスの存在だった。

よくよく観察したら、アダルウォルフの額ひたいに赤い魔法陣が浮かんでいる。あれが獷猛化させる魔法薬を飲んでいた証あかしなのだろう。

「なんでこんな重要なことを忘れていたのか！」

私の存在が彼を刺激してしまったのだろう。アダルウォルフは鉄格子に向かって体当たりを繰り返している。

何世紀も前に造られたであろう古い鉄格子は、ミシ、ミシと音を立てて限界を訴えていた。今まで形を保っていたのが不思議なくらいである。

「ど、どうしよう！ この王太子、たしかとんでもないザコキャラだったような」

王太子ヨシカは序盤で処刑される、取るに足らない小物である。

序盤で七騎士との戦闘があるものの、操作を覚えるためのチュートリアル的な役割をこなすばかりだった。

腰ベルトに手を伸ばしたが、いつも佩はいている剣は——執務室の壁に立て掛けたままだ。

転移魔法で撤退して、戦闘態勢を整えなければ。

「マップオープン!!」

そう叫んだものの、転移マップは表示されない。代わりに、ありえない赤文字が目の前にぼんやりと浮かんだ。

——逃げられない！

「なっ!?!」

それは、ゲームでボス戦を行うさいに何回も目にしていた言葉である。

通常の戦闘は逃走できるのに、ボス戦は逃げられないというゲーム世界のお約束であった。

「ちよっ、こんなところまでゲームと同じ仕様でなくともいいのに！」

こうなったら、ハムリンを頼るしかない。

「いけ、ハムリン！ 〴〵かじりつく〴〵！！」

『ハ、ハムリンの戦闘能力は皆無かいむなんだよお！』

「な、なんだってー!?」

そんな会話をしているうちに、アダルウォルフは鉄格子を破壊してしまった。

慌あわてて上の階へと駆け上る。

『グルルルル!!』

アダルウォルフは追いかけてくるが、手足に重りが付いているので、そこまで早くはない。

けれども、このまま外に出るわけにはいかないだろう。

「うわああああ、早速死ぬ!! 確実死ぬ!!」

死因…かじりつかれたことによる、失血死だろうか。

絶対に嫌すぎる。

「ハムリン、武器かなんか持ってないのか!？」

『あ、あ、あ、あるんだよお!』

「早く出すんだよお!!」

慌てるあまり、口調が移ってしまう。いや、そんなことはどうでもいい。戦える得物^{えもの}があるのなら、一秒でも早く貸してほしかった。

ハムリンはくるりと一回転し、ハムリン自身が武器へと姿を変える。空中からくるくと降ってくる剣の握り^{グリップ}を、タイミングよく握った。

すらりと伸びた白銀の剣。鍔^{ツバ}部分には、なぜかハムリンの顔が付いていた。

「こ、これは——!？」

『ハムリン・ソードなんだよお!』

鍔にあるハムリンの顔が喋^{しゃべ}ったので、飛び上がるほど驚いてしまう。

「えっ、猛烈にダサイ」

『この世界の最強の剣で、パラダイス・エデン^グでの隠しクエストで入手できる、とっておきの武器なんだよお』

「そ、そうなのか」

隠しクエストをするほどやりこんでいなかったの、ハムリン・ソードの存在は初耳であった。

『ハムリン・ソードは魔法剣で、魔法を斬って無効化することができるんだよお!』

今の状況にうってつけの剣というわけだ。

すぐ背後まで、アダルウォルフが迫っていた。王太子ヨシカのステータスは、ザコ^グの一言であるが、ハムリンの剣があればアダルウォルフに勝てるかもしれない。

階段を三段飛ばしで駆け上がり、振り返ってアダルウォルフに飛びかかる。

この一撃にかけていた。

まっすぐ伸ばした剣が、アダルウォルフの額に浮かんでいた魔法陣を貫通する。

『グオオオオオオオオオオ!!』

アダルウォルフの咆哮が、地下全体に響き渡る。耳をつんざくほどの音量であった。

魔法陣はハムリン・ソードの一撃によって消滅した。

「や、やったか」

『ご、ごくろうさまなんだよお』

ハムリンは剣から元の姿になり、安堵あんどしているようだった。

アダルウォルフ自身は獐猛化が解けたからか、人間の姿に戻った。もちろん全裸である。

急いで彼のもとへ駆け寄る。意識はないようで、瞼まぶたは閉ざされたまま。呼吸や脈拍を確認する。

「ひとまず問題なし、か」

外傷は見つかからないが、十二歳にしては体が小さく、やせ細っている。

おそらく、食事など充分に貰っていなかったのだろう。育ち盛りだろうに、気の毒な話だ。

マントを脱いで、彼の体かみに被せてあげた。

地下牢へ戻り、牢の中に巨大な狼がいるような幻術をかけておく。鉄格子も壊れていないように

見せかけておいた。

王太子ヨシカの戦闘能力はザコレベルだが、魔力値はかなり高い。

しかしながら攻撃魔法の適性はほぼなく、戦いに役立たない幻術のみ使えるのだ。

「これでよし」

幻術で自分自身を作りだし、罪人の塔を見張る騎士達に挨拶しておくよう、仕込んでおく。幻術の自分がらせん階段を上っていくのを確認すると、アダルウォルフを抱き上げた。

「ぐっ……重たい」

いくら痩せて見えるとはいえ、ザコ王子の細腕では抱えきれないようだ。

すぐさま、先ほどハムリンに教えてもらった転移マップを展開させる。

「マップオープン!!」

自室をタップすると、一瞬にして転移した。

「きゃあ!」

部屋には愛人のひとりである、フォーゲル侯爵夫人がいたようだ。

「で、殿下、どちらからいらっしゃったのですか!? それに、その子はもしや——?」

「説明はあとだ。彼の体をきれいにしてどこかへ寝かせておくよう、従僕に命じておいてくれ」

「承知しました」

優秀な愛人であるフォーゲル侯爵夫人は、追及せずに命令を聞いてくれた。

「うう、疲れた」

いろんな記憶が一気に甦ってきた上に、戦闘を行い、魔法を使ったからか、とてつもない疲労感に襲われる。

少しだけ休もう。そう思ったのと同時に、長椅子に倒れ込んだのだった。



「――殿下！ ヨシカ王太子殿下！ 起きてくださいませ！」

フォーゲル侯爵夫人の声と共に、体がガタガタと揺り動かされている。

「うーん、あと五分……」

「連れてお帰りになった少年が、暴れております！」

「な、なんだってー！」

想定外の事態を耳にし、慌てて飛び起きる。

「どうした？」

「ご命令通り従僕に体をきれいにさせて、客間に寝かせておいたのですが、監視していた騎士に飛びかかったようで」

騎士は獣人顔負けの反射神経で避け、脱出したようで無傷らしい。

さらに、鍵をかけて閉じ込めたようだ。

「そのあと、中の少年は扉を引つ掻いたり、体当たりしたりしているそうです」

「なるほど」

まだ外に出ていないことは、獣人化した状態ではないのだろう。

ひとまず、アダルウォルフをどうにかしなければならぬ。

三年間監禁されていたと言うので、とんでもなく恨まれているに違いない。

話を通じると信じて、話をしに行こう。

「殿下、あの少年はいつたい何者なのですか？」

「第二王子アダルウオルフだ」

フォーゲル侯爵夫人は眉間に皺を寄せ、顔を伏せる。

なんとなく、そうではないのか、と予想していたのだろう。

アダルウオルフは公式の場に出たことは一度もなく、血を分け合った私の前にさえ、姿を現した覚えはない。

父王の公妾だった女性が産んだ子どもを、周囲の者達は正統な王子だと誰も認めていなかったからだろう。

予備が欲しかった父王はアダルウオルフを第二王子として教育するよう命じていたようだが、実際は誰にも見られないように存在を隠されていた。

おそらく、まともな教育も受けていない。

「殿下、アダルウオルフ王子を連れてきて、どうなさるおつもりですか？」

「それは……皆を集めて話そうか」

アダルウオルフはしばし放置しておいても問題ないだろう。扉を破ったとしても、騎士が止めてくれるはずだ。

取っ組み合いになったら力で負けるだろうから、体力がなくなつて疲れた頃合いに話し合いをし

たい。

まず先に、愛人達に事情を説明しないといけないだろう。

例の日記帳によれば、過去の愛人達は王太子ヨシカに愛想を尽かし、途中でいなくなっている。袋小路に追い込まれた結果、やつあたりしてしまったらしい。

さらに愛人達は騒動に巻き込まれ、七騎士に殺されたという記録も残っていた。

彼女達を危険に晒すわけにはいかない。一刻も早く、解散させる必要があるのだろう。

久しぶりに五名の愛人達を集結させる。愛人とは名ばかりの、私の腹心だ。

最年長であり、母の一番の信者だったヴォルフ公爵夫人。

明るく朗らかで、私のために侯爵と政略結婚してくれたフォーゲル侯爵夫人。

執務の補佐をし、教育係も兼任するフックス伯爵夫人。

自尊心が高く、ツンとした態度でいるハーン子爵夫人。

騎士一家の出であり、護衛として傍に侍るボック男爵夫人。

この美しいだけでなく頼りになる女性陣が、私を支えてくれる愛人達である。

「突然呼び出してすまない。皆に相談があつて——」

緊急事態であることはすでに把握しているのだろう。皆、神妙な面持ちでいる。

何から話そうか。迷ったものの、ひとまずもつとも大きな問題について打ち明けた。

「先ほど、私のもとに創造神の命令で、精霊が遣わされた」

上着のポケットに入っていたハムリンが、顔を覗かせる。

神々しく下り立ちたかったようだが、ずんぐりむっくりな体が許さなかった。

ポケットに後ろ足を引っかけ、ころころと転がっていく。

私の膝ひざで大きく跳ね上がると、見事、机に着地していた。

『精霊ハムリンだよお』

威厳なんて欠片かけらもない様子に、愛人達の表情筋が少しだけ引きつる。

フォーゲル侯爵夫人のみ耐えられなかったのか、「ふふ」と笑っていた。

「ここにいるハムリンが、神の予言を運んできてくれたのだ」

予言というのは、この先、私が、宵の国アーベントの七騎士に殺される、ということ。

皆、目を見開き、言葉を失っているようだった。

「闇に葬られてしまう原因は私にあるそうだ。なんでも私がエデン姫に不義理を重ねた結果、七騎士の怒りを買ってしまうらしい」

エデン姫との結婚を決めたのは父王である。父王ははまだ、私が女である事実を知らないのだ。

記憶が戻る前の私は、それでもどうにか上手うまくやるつもりだった。

振り返ってみると無茶でしかない話だが、愛人達の支えがあれば可能だと思ひ込んでいたのだ。

「私が女だと正体を明かして結婚を断ったら、死の運命は回避できるだろう。けれどもそれは、亡くなった母の名誉を大きく傷付けてしまう」

それだけは避けたい。

なぜ、会った覚えがない母をここまで尊重してしまうのか。その理由は、母の信者である愛人達に育てられたからだろう。彼女達は私が幼少期の頃から、母の偉大さについて語って聞かせてくれたのだ。そんな事情があり、私は母を尊敬し、大切に想っている。

「死を回避するにはどうすればいいのか考えた」

エデン姫に嫌われるのも、避けるのも、七騎士の逆鱗げきりんに触れてしまう。

「そこで思いついたのが、エデン姫と婚姻が結ばれる前に、エデン姫側から婚約破棄され、この国から追放される、という選択だ」

まだ三年間も猶予がある。その間に、さまざまな手法を用いて婚約破棄を目指せるはずだ。

ここで、ヴォルフ公爵夫人が質問を投げかけてくる。

「では、エデン姫の祝賀会はどうなさるおつもりですか？」

「中止だ」

「しかし、もうすでにエデン姫に祝賀会の開催は伝えており、参加の意思も届いております」

「それでもいい。急遽きゅうきょ、中止になったと手紙を書こう」

エデン姫は面白くないと思うはずだ。そうした小さなことを重ね、彼女が、暁の国ゾンネにやってくる前に婚約破棄を促すのだ。この方法を取ったら、七騎士の脅威も私に届かないだろう。

「同時進行で、アダルウォルフに即位するための教育を施す」

私が追放されるまでの三年間、徹底的に叩き込んだら、なんとか使い物になるだろう。

その計画にフックス伯爵夫人が物申す。

「アダルウォルフ王子が台頭すれば、第二王妃が黙っていないのでは？」

第二王妃ゲートルート。母が亡き後、父が後妻に迎えた女性だ。

もともと母の侍女のひとりで、母が亡くなって傷心の父王の心を癒やしていたらしい。

母の国民的人気が高かったばかりに、父王と結婚した第二王妃に対し、人々は非難の声をあげていた。

けれども愛らしいハインツ王子の誕生をきっかけに、第二王妃に対する反感は収まったようだ。

現在、ハインツは六歳である。

男装王太子である私や、特例で王位継承権を与えられたアダルウォルフがいなければ、ハインツが正統な王太子だったのだ。

第二王妃は友好的な態度でいるものの、腹の中では何を考えているのかわからない。

ひとまず、アダルウォルフについては第二王子だと周囲の者達に公表しないようにしよう。

「アダルウォルフには、継承権についてどう感じているのか、本人に聞いてみるから。もしも国王になる気がないのであれば、継承権を返上させるのもいいのかもしれない」

ハインツの補佐官として、支える未来もあるはずだ。

アダルウォルフは『パラダイス・エデン』の本編では、酷い目にしか遭っていないかった。その挙げ句、ラスボスとして始末される。

そんな未来よりも、平穏に生きる道があるのなら選ばせてやりたい。今はそう考えていた。

「というわけで、前置きが長くなったが、私は七騎士に殺されないよう、あがいてみようと思って

いる。この先、私の地位は不安定なものになるだろう」

これまで、彼女達はよく仕えてくれた。それぞれ家族がいるのに、年がら年中私の傍にいてくれたのだ。もう、解放してあげたい。

「今後は私の傍から離れたほうがいいだろう。お前達も七騎士に命を奪われる可能性がある。退職金も出すから、皆自由に——」

そう口にしかけた瞬間、ハーン子爵夫人がその場にひざまず跪く。

「ヨシカ王太子殿下！ 私は何があるかと、運命を共にする所存でございます」

普段、強気できつい態度しか見せないハーン子爵夫人が膝を折るなんて。

彼女だけではなかった。他の四名の愛人達も、私の前にひれ伏す。

ヴォルフ公爵夫人はまっすぐな瞳を向けながら訴えた。

「ヨシカ王太子殿下の行く先が地獄であろうと、ご一緒します」

すでに、不吉なことを言っている。彼女の息子はまだ成人していないのに、なんだか申し訳なくなつた。

フォーゲル侯爵夫人も続いた。

「わたくしも、ヨシカ王太子殿下と共にありますわ。そのほうが楽しいので」

もうすでに跡取りは産んだので、問題ないと言ってくれる。明るい様子に、少しだけ救われた。それにフックス伯爵夫人までが残ったのは意外だった。

「私がいないと、ヨシカ王太子殿下はお菓子を食べ過ぎないか心配ですので」

そう。何を隠そう、私は甘い物に目がない。幼少期からフックス伯爵夫人が厳しく制限してくれ
たので、今の体型を維持できている。

ボック男爵夫人は迷いなんぞなかったようだ。

「私の命はヨシカ王太子殿下のために使うと決めておりました。どうかご心配なく」

「みんな……」

この先は王太子でもなんでもない。追放されたらただの「ヨシカ」になるのだ。

それでも、彼女達はどうしてきけると訴えてくれる。

「ありがとう」

愛人達の清く美しい忠誠に、心から感謝したのだった。

ひとまず、愛人達は残るようだ。頼っていいものか不安はあるが、あれだけの決意を見せてくれ
たのだ。私が何を説いても、離れないだろう。

「さっそくだが、アダルウォルフのもとへ向かう。暴れているようなので、ボック男爵夫人、つい
てきてくれるか？」

「承知しました」

荒事に慣れているボック男爵夫人を同行させ、アダルウォルフの様子を窺うかがうに行こう。

机で大人しく話を聞いていたハムリンもポケットの中に詰め込んでおいた。

廊下を歩きながら、作戦について話をしておく。

「ボック男爵夫人、私が合図を出すまで、動かないでほしい」

「それは、危険なのでは？」

「頼む」

「承知いたしました」

客間に向かうと、遠くからでもドンドン！と扉を叩いて暴れるような物音が聞こえた。

正面から対峙^{たいじ}するのは恐ろしいので、続き部屋となっている隣から侵入しよう。

扉の近くにいた騎士達が同行を申し出たが、あまり大勢で押しかけるとアダルウォルフの警戒が強まってしまう。ひとまず、ボック男爵夫人だけを連れて、アダルウォルフのもとへ行った。

中へ入ると、アダルウォルフは驚いた表情でこちらを見る。まさか背後から人がやってくると想定していなかったのだろう。

「やあ、初めましてだな、アダルウォルフ。私はこの国の王太子であるヨシカ・フォン・エスターライヒだ」

世話役を務めていた侍従^{いむ}曰く、アダルウォルフは自分が第二王子だと自覚していないらしい。

ひとまず王宮の環境に慣れてから、彼が王族であるということ、そして私が兄ということを説明しようと思っている。

アダルウォルフは私をキリリと睨^{にら}みつけ、敵対心を露わにしていた。

「お前……お前が、僕を閉じ込めたのか!？」

「え、違っ」

アダルウォルフは目にも止まらぬ速さで、私のもとへ駆けつけ、押し倒してくれた。

どうやらアダルウォルフは、自分を閉じ込めた犯人を知らないらしい。

また、私が王太子ヨシカであることも把握していないようだ。

「うううう……ゆ、許さない！」

「ご、誤解だ！」

ボック男爵夫人には視線で合図をだし、改めて動かないよう命じる。

アダルウォルフは牙を剥きだしにし、怒りを露わにしていた。こうして見ると、やはり彼は人間とは異なる生き物なのだな、と思ってしまう。

なんて、のんきに考えている場合ではない。このままでは喉元のどもとを噛み千切られてしまうだろう。

あれだけ暴れていたのに、体力を消費しているようには見えない。もっと時間を置けばよかったか。ついに力に押し負け、アダルウォルフは私の喉元めがけて噛みつくこうとする。

けれども寸前で避け、肩にかぶりつく。

「うっ!!」

鋭い痛みに襲われる。

「殿下!!」

「ボック男爵夫人、まだだ」

抵抗し暴力的に突き放したら、さらに牙を剥くだろう。

こういうとき、どうすればいいものか。痛みに耐えるために奥歯を噛みしめながら考える。

ふと、子どものときに観たアニメ映画で、獣に噛みつかれたとき、優しく声をかけるシーンを思

い出した。早速実践する。

「い、痛くない」

「ううううう」

「いいいい、痛くない、痛くない」

言っているうちに、台詞は「痛くない」ではなかったのではないのか、と疑問を覚える。痛くないだと、単なる私の感想になるだろう。

「いや、痛い！ 痛い、痛い、めっちゃ痛い！」

最近の若者は、めっちゃを使わないとか、死語だとか、そんなの本当にどうでもいい。我慢も限界だ。そう思っ、私はポケットに詰めていたハムリンに、救援を要請した。

「ハムリン、頼む、アダルウォルフをくすぐってくれ」

『わ、わかったんだよお』

ポケットから飛び出したハムリンは、アダルウォルフの寝間着の中へ侵入する。そこから、彼のお腹をくすぐってくれた。

「あつ、あは、あはははははは！」

アダルウォルフは私から離れ、笑い始める。作戦は大成功だ。

肩の傷には、ボック男爵夫人が魔法薬をかけて治してくれた。

とてつもなく染みたが、名誉の負傷だ。

アダルウォルフはハムリンを捕獲すると、投げ飛ばす。ハムリンは『わあ〜』と悲鳴をあげな

がら弧を描くように飛んでいった。

「アダルウオルフ」

声をかけると、アダルウオルフは敵対心剥き出しの目で見つめる。

「こうして会うのは初めてだな。私は王太子のヨシカという」

アダルウオルフの反応は極めて薄い。もしかしたら王太子という存在が何者なのか、教えられずに育った可能性がある。

「私はお前を保護したい。そして教育を施し、一人前に育てたいのだ」

両手を広げ、敵意はないことを伝える。

「お前をずっと閉じ込めていたのは、私ではない」

「ならばなぜ、今さら助けた？」

ごもつともな質問に、胸が苦しくなる。

私は前世の記憶が戻るまで、アダルウオルフを気にかけてしたことなど一度もなかったから。

「し……知らなかったんだ」

嘘は言っていない、嘘は。

前世の記憶が戻る前の私は、アダルウオルフがどこにいるのか、どう過ごしているのかまったく把握していなかった。

「風の噂^{うわさ}でお前が囚^{うわ}われているのを知り、いてもたってもいられず、助けに行った」

「信じない！ お前は僕を利用するつもりなんだ！」

痛いところを突いてくれる。

広い意味で表すのであれば、私はアダルウオルフを利用する気である。

けれども彼を一人前に育てあげ、立派な王族になってもらいたいというのも嘘ではない。

「これから私の行動を見て、もしもお前を騙^{だま}してると思えば、殺せばいい」

少々過激だが、これくらいしないと、信用してもらえないだろう。

ここで、例のアニメの台詞を思い出した。すぐに採用し、アダルウオルフに対して使ってみる。

「アダルウオルフ、怯^{おび}えるな。私を怖^{こわ}がらないでくれ」

口で言うだけならば、いくらでもできるだろう。信用してもらえるためには、行動で示さないとけない。

腰に佩^はいていた剣を捨て、両手を広げる。敵意はまったくなく、とわかりやすく伝えたつもりだ。

「私はお前の、心の支えになりたい」

これまで習った知識や礼儀のすべてを、アダルウオルフに教育させるつもりである。

「絶対に見捨てない。一度だけでもいい、どうか私を信じてくれ！」

私の暑^{あつ}かしいまでの訴えを聞いたアダルウオルフは、真珠のような美しい涙を流す。

ずっとひとりで不安だったのだろう。もっと早く助けてあげたらよかった。

べたん、とその場に座り込んだので、体を支えてあげた。

もしかしたらまた嘔^{おう}みつかれるかもと恐れていたが、アダルウオルフは身を任せてくれた。もう

大丈夫かもしれない。



そう思いつつ、アダルウオルフの頭を撫でてやる。すると、彼はあつという間に眠ってしまった。どうやら、気を許してくれたようだ。

ホッとしつつも、胸の中にモヤモヤが残る。

アダルウオルフを拘束し、地下牢に閉じ込めたのはいったい誰なのか。

これについても調査したいところだが、下手なことに首を突っ込んで、私の立場を危うくしたくない。

ひとまず、アダルウオルフの扱いについては慎重になったほうがいいだろう。



それからというものの、フックス伯爵夫人と一緒にアダルウオルフの教育を始めた。

彼は一言で表すならば野生児。文字が書けないどころか、食事のマナーすら知らないようだった。父王はアダルウオルフを予備として、王太子に準ずる教育を施すように命令していたはずだ。それなのに、アダルウオルフは何も身に着けていなかったのだ。

幸いと言うべきか、アダルウオルフは熱心に勉強に取り組んでいた。

褒めれば褒めるほど、やる気を見せてくれたのだ。

「アダルウオルフ、文字が書けるようになったとは、偉いぞ！」

「ありがとうございます、ヨシカ殿下！」

一か月前まで牙を剥きだしにし、ガルガル唸って警戒をしていたのに、今は愛犬のように懐いてくれている。

文字は習得できたし、計算も得意なようだ。もしかしたら、三年経たずとも活躍できるようになるかもしれない。期待が高まる。

アダルウォルフの教育は順調そのものであった。

一方で、エデン姫のほうはというと――。

「殿下、エデン姫より、祝賀会中止についての返信がありました」

「ああ、ありがとう」

ハーン子爵夫人が持ってきた手紙を、さっそく開封する。

急な中止にもかかわらず、手紙には「またのご機会を楽しみに待っております」という健気な言葉が書かれていた。

良心がズキズキ痛んだものの、思っていたよりもエデン姫のダメージになっていないところが気になる。

「ハーン子爵夫人、女性というのは、男のどんな部分に冷めるのだ？」

「そうですね、気が利かない贈り物でご機嫌取りをしてるときでしょうか？」

「それだ!!」

即座に採用する。

祝賀会を中止にしてしまった詫びとして、何か贈り物をしよう。

「いったいどういった品がいいものなのか。ハーン子爵夫人は何を貰ったとき、最悪だと思っ
た？」

「生地が極端に少ない下着ですね」

「とてつもなく最悪だな」

ただ下着なんかをプレゼントしたことが七騎士にバレたら、怒りを買ってしまいそうだ。

彼らを刺激するのはなんとしても避けたい。

「もつとこう、エデン姫をがっかりさせると言うか、期待をごっそり削ぐような贈り物がいいな」

三日三晩熟考した結果——自作のラブソングを贈ることに決めた。

きちんと楽器を使って作曲し、詞まで考えた。

製作に五時間ほどかかったが、自分でも惚れ惚れするほど気が利かない贈り物だ。

このまま贈るのはもつたないから、と愛人達にアカペラで披露してみたが、皆、萎えた表情で
聞いてくれた。

歌い終わったあとの、パラパラとやる気のない拍手を前に、勇気づけられる。

これを受け取ったエデン姫は、うんざりするだろう。

一応、気持ちはこもっているので、七騎士も無下にはできないはずだ。

期待を込めて、自作のラブソングを〴〵宵の国アーベントへ送った。

ここ一か月で、一步、一步と追放への道へ近付いていることだろう。